

2019 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	唐井 隆徳
研究テーマ	upadhi の用法から見る縁起説の成立
研究概要	初期仏典における upadhi の用法の変化を資料の新古に基づいて明らかにし、それによって縁起説の成立史における三支縁起説の位置づけを明らかにする。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>2019 年度は、縁起支となる upadhi と upādāna の用例を調査し、両語の違いを明らかにしようと試みた。その結果、三支縁起説の支分である upadhi は、文脈に応じてその内容が変化する個別的な語であるため、upadhi を滅しても苦が滅さない場合があることが分かった。しかし、縁起説が仏教思想の中で重要な位置づけになると、苦の滅に繋がらない場合もある upadhi は縁起支となる資格を失うことが予想される。一方、upādāna を形成する upa-ā-√dā の派生語を滅すれば解脱や涅槃に至ると説く用例は非常に多く、upādāna は縁起支としてより相応しい語と言える。以上のことから、渴望 (taṇhā) に条件付けられるものとして upadhi ではなく upādāna を設定したと考えられる。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>① 発表：印度学仏教学学会（2019 年 9 月）「初期仏典における upadhi の用法 — 縁起説の成立に関連して—」 於：佛教大学</p> <p>② 発表：佛教史学会学術大会（2019 年 11 月）「縁起説の成立史における upadhi と pādāna」 於：花園大学</p> <p>③ 論文：「初期仏典における upadhi の用法 —縁起説の成立に関連して—」『印度学仏教学研究』68-1. 47-51 日本印度学仏教学会（2019 年 12 月）</p>
3. 今後の課題	<p>本研究に対する今後の課題としては、佛教史学会学術大会にて指摘を受けたように、upadhi という語のより原初的な用法を確認し、そこから仏教やジャイナ教へどのように変遷したのかを明らかにするため、ヴェーダ関連の文献を調査していくことが必要となるだろう。</p>